The Thinking Piece ”Obscure solutions”
- New design contemporaries in Japan

ミラノデザインウィークにてエキシビションを開催
会場：ミラノ中央駅エリア DROPCITY　会期：4月17日（月）-23日（日）

ライターの土田貴宏、デザインスタジオ「we+」の安藤北斗と林登志也を中心にスタートした、多様な社会課題についてデザイナーに参加を呼びかけ、発信の場をつくるプラットフォーム「The Think Piece」は、2023年春、ミラノデザインウィークに出展します。

2022年4月に東京で開催されエキシビションに続く第2回は、海外に舞台を移し、we+、TAKT PROJECT、本多沙映、簑島さとみ、太田琢人の5組によるグループ展をミラノで開催します。今回は、社会的課題の中でも可視化されにくい事象に対する「Obscure solutions」をテーマに、各自の考察を作品を通じて提示し、世界を再考するきっかけを増やします。

今日の社会問題は、多様な要因が複雑に絡み合い、理解することが容易ではありません。ある目的のための解決策が、さらに状況を悪化させたり、別の問題を引き起こしたりすることもあります。このような問題は、人々に無力感をもたらし、時には問題の存在そのものが意識の外に追いやられてしまいます。こうした状況におけるデザイナーの役割として、曖昧な問題に対し、より曖昧な解決策（Obscure solutions）を提供することの可能性を考えます。

本展に参加する5組のデザイナーは、廃棄物処理、生活環境の変化、視覚偏重の認識、自然と人工物の関係、そしてデザイン特有の困難といった課題に対し、それぞれの視点から「考えるための作品」を提示します。

開催概要

【会期】4月17日（月）- 23日（日）10:00 - 18:00　※DROPCITYは4月15日より一部オープン予定
【会場】DROPCITY / Via Sammartini 48, 20125 Milan
【参加デザイナー】we+、TAKT PROJECT、本多沙映、簑島さとみ、太田琢人
【展覧会企画チーム】土田貴宏、安藤北斗（we+）、林登志也（we+）、吉泉聡（TAKT PROJECT）
【キュレーション】 土田貴宏
【グラフィックデザイン】前島淳也
【コーディネート】金森裕貴子、合田紘子
【協力】株式会社アイエスエヌ、HAKUTEN
【プレス】HOW INC.
【ウェブサイト】www.thethinkingpiece.com
【インスタグラム】@thethinkingpiece（https://www.instagram.com/thethinkingpiece/）

The Thinking Piece

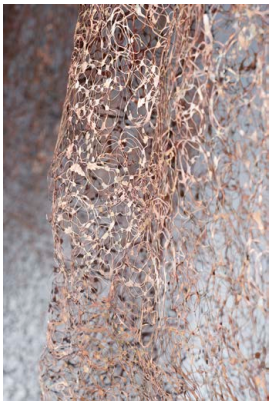
ライターの土田貴宏、デザインスタジオ「we+」の安藤北斗と林登志也を中心に、2022年春にスタート。多様な社会課題に対してデザイナーに支援を呼びかけ、その発信の場をつくる非営利のプラットフォーム。2022年に東京で開催した展覧会では国内外19組のデザイナーの作品を展示販売し、その収益をウクライナ人道支援のために寄付した。EDIDA2023においてジャパニーズ・ソーシャル・デザイン・プロジェクト賞受賞。

DROPCITY　https://www.dropcity.org

ミラノ中央駅の西側にある Via Sammartini沿に2024年の完成を目指し再開発中のエリア。完成後は、ギャラリー、研究所、生産所、オフィス、図書館などの機能を持つ施設としてオープンする予定。今年のミラノデザインウィークに多くの展示が行われるほか、近隣にはDimore Centraleが昨年オープンするなど、エリア全体の存在感も高まっている。

参加デザイナー / 作品

we+　https://weplus.jp/



リサーチと実験に立脚した手法で、新たな視点と価値をかたちにするコンテンポラリーデザインスタジオ。林登志也と安藤北斗により2013年に設立。利便性や合理性が求められる現代社会において、見落されがちな多様な価値観を大切にしながら、自然環境や社会環境と親密な共存関係を築くオルタナティブなデザインの可能性を探究しており、日々の研究から生まれた自主プロジェクトを国内外で発表する他、そこから得られた知見を生かし、さまざまな企業や組織のプロジェクトを手がける。Dezeen Awards 2022 / Emerging Design Studio of the Year Public Vote（英）、Wallpaper* Design Awards 2022 / Best Elements of Surprise（英）、EDIDA 2019 / Young Designer of the Year Nominee（伊）等受賞多数。作品はドイツのヴィトラ・デザイン・ミュージアムに永久収蔵されている。

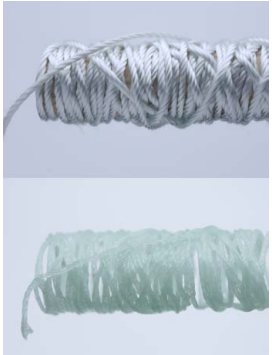
「Urban Origin」

「Urban Origin」は、不適切かつ複雑になりすぎてしまった人間と素材の関係の再構築を試みるリサーチプロジェクトです。東京を銅線、発泡スチロール、瓦礫くずなど使用済み素材の原産地と見立てることで、「土着の素材を使って、自分の手でシンプルに加工する」という、人間と素材の関係の原点に立ち戻り、使用済み素材の全く別の価値を探っています。本展では、現代文明を象徴する素材で、その過剰な採掘が問題視されている銅線（廃棄電線）を、自らの手で加工した大型のオブジェ「Haze」、使用済み発泡スチロールのリサイクルの流れを見直す家具「Refoam」、再生利用が困難なため、埋め立てに回される混合廃棄物や瓦礫くずから生まれた、新たな素材によるオブジェ「Remains」の3作品を展示します。

TAKT PROJECT

www.taktproject.com

吉泉聡を代表に2013年設立。東京と仙台に拠点を構えるデザインスタジオ。既存の枠組みを揺さぶる実験的な自主研究プロジェクトを行い、その成果をミラノデザインウィーク、デザインマイアミ、パリ装飾美術館、香港M+、21_21 DESIGN SIGHT、京都市京セラ美術館など、国内外の美術館やデザインの展覧会で発表・招聘展示。その研究成果を起点に、様々なクライアントと「別の可能性をつくる」多様なプロジェクトを具現化している。世界で最も影響力のある建築・デザインメディアの１つDezeen（イギリス）が主催するアワードDezeen Awards 2019にて「Emerging Designers of the year」に選出。また、国際的なデザインフォーラムDesign Miami/ Basel（スイス）が、毎年世界の3組のデザイナーに送るアワード「DesignMiami/ Swarovski Designers of the Future Award 2017」に選出など、国内外のデザイン賞を多数受賞している。3つの作品が、香港の美術館M+に永久収蔵されている。



「Homage to SHIRO KURAMATA: Unexplainable」

「説明できないこと」が重視されない現代社会の時流こそ、社会課題の一つだと考えている。心が動く瞬間は、すぐには「説明ができない」。しかしそれこそが、人の心を耕し、深く行動に影響を与え続ける。そんな言語化できない価値の存在を、デザインは訴え続けてきたはずだ。

日本のコンテポラリーデザインの祖ともいえる倉俣史朗のデザインは、常に言語を超えたところに存在してきた。 ヨゼフ・ホフマンの椅子にスチール平棒をまきつけ、椅子ごと焼き尽くし、スチール平棒だけが残った氏の作品「Begin the Beguine（1985年）」。平棒をガラス繊維に変え、「焼く」という行為を引用した。ヒモ状のガラス繊維は、焼く事で椅子の形をしたガラスの幻影となる。ガラスは氏を象徴する素材でもある。この作品を通して、社会課題とデザインの根底にある価値を再考したい。

本多沙映 https://www.saehonda.com/

デザイナー/ジュエリーアーティスト。2010 年に武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科を卒業後、2013 年からアムステルダムのヘリット・リートフェルト・アカデミーのジュエリー学科で学び、2016 年に卒業。2021年より日本に拠点を移し、国内外で作品を発表するほか、コミッションワークも手がけている。既存の価値体系に詩的なアプローチでゆるやかに疑問をなげかけながら、オルタナティブな美意識を探究。自然と人工物の境界線が曖昧になりつつあるこの世界を俯瞰で見つめながら、新しい価値をかたちにする。作品はアムステルダム市立美術館、アムステルダム国立美術館、アーネム博物館に永久所蔵されている。

「Cryptid」

動物の毛皮の多種多様な色彩と模様、手触りにインスピレーションを受けながら、人間はその再現を通して自然の産物の美しさを祝福してきました。そんな人間のものづくりにおける価値ある自然との関わりを、大量消費という文化の中でネガティブなものへと転化させてしまわないように。「Cryptid」はそんな思いからつくられた新しい形の毛皮です。メーカーや縫製工場で廃棄されるフェイクファーのはぎれをフェルティング技術を応用し、毛を絡ませながら縫製をせずにひとつひとつ手作業で繋ぎ合わせています。

簑島さとみ https://www.satomiminoshima.com/

異なる素材や色の可能性を探求するデザイナー。素材や色に関する背景や文脈を理解し、新しい解釈につなげることを目指している。物が持つ手触りや質感を重視した素材リサーチと詩的なストーリーを組み合わせて、コンセプトを可視化する。武蔵野美術大学基礎デザイン学科（2014年）、オランダのデザインアカデミーアイントホーフェン（2019年）を卒業。現在はオランダに拠点を置き、ヨーロッパを中心に国内外で作品を発表している。2022年にはメゾンエオブジェ Raising Talent Awards Japanを受賞。

「Inflatable Leather」
テクノロジーの進化に伴い、「ノマド化」する現代人のライフスタイル。人々が都市間の移動を繰り返す中で、プロダクトはますます薄く、軽く、コンパクトであることが求められています。それはモノだけでなく、私たちの居住空間も同様です。私たちはどうすれば多くの持ち物を抱えながら、軽やかに移動することができるでしょうか？ 空気の出し入れでモノのボリュームを自由自在に調節できるインフレータブルは、この問題の解決策になり得ます。ゴムチューブの内側を本革で覆った「Inflatable Leather」を通して、長く手元において使い続けたくなるようなインフレータブルのあり方をリサーチしました。

太田琢人 https://www.deco-designcomplex.com/

1993年フランス生まれ。2017年武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業。2022年東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了。文化や文明の発展への反動で失われた感覚を再露出し、言葉や形で表現する。 現在は、生命活動やものづくりの根源である「分解」と「生産」をキーワードに、モノとモノの関係性に注目している。コミテコルベールアワード 2019 グランプリ受賞、ADF　ミラノサローネデザインアワード 2021で最優秀賞。主な展示として、「 Fuori Salone2021」Tortona37(Italy)、「TAKE YOUR TIME」Tongyoeng Triennale 2022(Korea)。

Afterglow
ものは視覚を伴うことが前提に作られているように感じる。音を通じてモノと人間の関係をもっと深く考えていきたい。目を閉じると周囲のモノの存在を認識できなくなる。「Afterglow」は特性を持った音を発生させる装置である。金属の性質を利用して、あなたが持っているモノのイメージとは少し違う音が聞こえるだろう。触れ合った余韻が空間に広がり残る、新たなモノと人間の関係である。

キュレーター

土田貴宏 https://www.instagram.com/tt0/

デザインジャーナリスト、ライター。1970年、北海道生まれ。会社員を経て2001年からフリーランスで活動。コンテンポラリーデザインを主なテーマとして、国内外での取材やリサーチをもとに専門誌などに寄稿している。2023年、21_21 DESIGN SIGHT（東京）で企画展「The Original」の展覧会ディレクターを務める。近著『デザインの現在 コンテンポラリーデザイン・インタビューズ』(PRINT & BUILD)。

プレスお問合せ先： HOW INC. / Tel. 03-5414-6405 / Mail. pressrelease@how-pr.co.jp

読者お問合せ先： The Thinking Piece / https://www.thethinkingpiece.com